

2025年度（令和7年度）事業報告

法人本部

1 施設を取り巻く現状と課題

(1)事業の種類及び利用者定員

① 第1種社会福祉事業

児童養護施設、障害児入所施設、障害者支援施設

② 第2種社会福祉事業

保育所、放課後児童健全育成事業、障害福祉サービス事業、障害児通所支援事業
老人デイサービスセンター、相談支援事業、障害児相談支援事業

③ 公益事業

地域支援事業、有料老人ホーム、生活支援宿泊所

(2)市町村等からの受託、補助事業等

延長保育事業、一時保育事業、障害児保育事業、生活困窮者就労訓練事業
子育て支援短期利用事業、由布市要保護児童見守り強化事業
由布市ファミリーサポート事業
由布市緊急時入所支援事業、C型事業（由布市元気アップ教室）

(3)地域における公益的な取組

保育所グランド開放、共生型子ども食堂「憩いのキッチン」
スマイル広場「夢教室」開放、福祉の森の開放（花見・グランドゴルフなど）
季節行事（夏祭り、ビッグフェスタ）の開催、総合避難訓練（地域住民の参加）

(4)運営方針

2025年度は庄内厚生館創立79年を迎える年であり、長期経営計画「庄内厚生館ビジョン2026～NEXT80～」の総まとめとして取り組み、創立80年に向けてプロジェクトチームを発足させて法人施設全体で準備に取り組みました。「庄内厚生館ビジョン2026～NEXT80～」のまとめとして、大分市玉沢地区においての新規事業であることも村植田放課後デイサービスの新築工事を行い、令和8年4月1日付けで開所することができました。「庄内厚生館ビジョン」の更新として、法人理念、私たちが大切にしたい価値観に加えて行動指針を定め、中長期経営計画（2027～2031年度）5年間における中期ビジョンの策定準備をしてきました。

令和6年度では障害、介護部門の報酬が改定され大変厳しい改定になっています。今後の制度改定に備え、持続的に成長することが必要不可欠であるため、「利用児者様の満足と

幸せの追求」「法人・施設の発展性と安定性の追求」「集うスタッフの幸せの追求」に基づき（図1）、「利用者本位の最良の福祉」を念頭に良質な福祉サービスの提供とサービスの質の向上に取り組むとともに、倫理観豊かな福祉に携わる人財を育成と地域社会への貢献をより一層取り組んできました。



図1 中長期経営計画「計画の柱」

2025年度（令和7年度）事業報告

職員相談室

1 施設を取り巻く現状と課題

(1) 運営方針

新たに開設して3年目を迎える年であり、法人内職員に対して職員相談室の機能を再度周知するとともに、心理相談やストレスチェック及びこころのセルフチェック等に取り組んでしました。

2025年度（令和7年度）では、昨年度に引き続き、新卒・中途採用職員へのメンタルヘルス研修や相談業務に取り組みました。また、法人内外のサポート資源との連携し、休職・復職支援サポートの充実を図り、更なるメンタル不調の一次・二次・三次予防強化に努めました。加えて、合理的配慮提供に伴う申請サポートや心理的側面に係る助言等には至っていません。

法人外業務では、合同会社オオイタ EAP システムズ及び別府大学臨床心理相談室にて心理相談及びストレスチェック等を実施しました。また、由布市内の福祉・医療業界はもとより、近隣である大分市の企業等に活動範囲を拡大してきました。相談室の活動を周知するとともに実績を積み重ね、地域への貢献に努めました。

2 施設の実施策と取組の方向性

(1) 職員が働きやすくやりがいを感じられる職場づくり

ア 福祉・介護業界のイメージアップを図り、多様な働き方を推進する。

実施施策	法人・施設の広報力強化（広報人財の育成）（達成度 100%）
現状と課題	社会福祉法人は、補助金や税制優遇を受けて社会福祉事業を行う特別公益法人であり、納税者である国民から伸託されて事業が成り立っている。したがって、利用児者・家族、潜在的利用者である地域住民に限らず、広く国民に対し法人の業務及び財務等を公表し、経営の透明性を確保することが求められる。 法人本部人事・広報課において、ホームページやSNS等を活用し、採用情報や両立支援の成果に関する広報活動を行っている。各施設においても積極的な情報発信が必要となる。
取組の方向性	① 法人・施設は、情報公開ページに法人・施設運営の透明性「事業計画」「事業報告」に関する随時公開を行い、を目指します。人事・広報課が中心となって、採用活動や両立支援の成果に関する広報をホームページやSNSにて行います。施設は、年間広報計画を基に事業の実施計画や報告等をホームページやSNS等に活用し広報することで、事業の見える化を進めます。 ② 人事・広報課は、継続的に情報発信を行い、コンテンツがより魅力に発信できるよう技術の向上を図ります。各施設と広報面でも連携をとりながら法人全体の情報発信力を向上させます。
取組み成果	① 法人・施設は、HP等に「事業計画」「事業報告」を情報公開ページに随時公開し、法人・施設運営の透明性を努めました。人事・広報課が中心となり、採用活動や両立支援の関する広報をホームページやSNSを活用しました。施設は、年間広報計画を基に実施した事業計画や報告等をホームページやSNS等に活用し、事業の見える化を努めました。 ② 人事・広報課は、継続的に情報発信を行い、コンテンツがより魅力に発信できるよう技術の向上に努めました。広報面においても各施設と連携し、法人全体での情報発信力の向上に努めました。

実施施策	育児・介護・疾病と仕事の両立支援（兼業含む）の充実（達成度 80%）
現状と課題	2022年度より、育児と仕事との両立支援として「パートナー面談」、2024~2025年度版人事・福利厚生制度「にじいろ」を改訂し、職員が理解・活用してもらうよう全体への周知を必要である。 職員・利用児者のQOL向上及び健康経営の推進を目指し、各施設

	の経営状況に応じた採用・人員配置（最低配置以上目標）を取り組みが必要である。
取組の方向性	① 「パートナー面談」は基より、2025~2026 年度版人事・福利厚生制度「にじいろ」に関する内容を周知するとともに、分かりやすい説明動画の作成、並びにアプリケーションを活用し配信して全職員に再度周知します。 ② 既存制度の利用者の声を全体にフィードバックし、対象職員に対して個別面談を実施することにより利用率向上を図ります。 ③ ホワイト企業認定の継続取得と新たに「えるぼし認定」取得への準備をします。また、令和6年度から障がい施設においても「ふくふく認証」が対象となり、取得への準備をします。 ④ 当法人の採用において、ハローワーク経由はもとよりインターネットを活用して、大学卒対象者として全国レベルでの応募を実施していますが、年々応募者の減少により希望人数の採用には至っていません。近年の採用状況において、外国人労働者の採用も進んでいることにより、当法人においても早急に必要とされるハード・ソフト面等の整備を行い、外国人労働者の採用を進めます。
取組み成果	① 「パートナー面談」は基より、2025~2026 年度版人事・福利厚生制度「にじいろ」に関する内容を周知し、説明動画を作成してアプリケーションにて配信し全職員に再度周知しました。 ② 既存の制度について、利用した職員の声を全体にフィードバックし、対象職員に対して個別面談を行い、利用率向上に努めました。 ③ ホワイト企業認定の継続取得と新たに「えるぼし認定」取得、障がい施設においての「ふくふく認証」取得への準備をしましたが、申請までには至りませんでした。 ④ 当法人の採用については、ハローワーク及びインターネットを活用して、大学卒対象者として全国レベルでの応募を引き続き実施しました。外国人労働者の採用については、ハード・ソフト面等の整備を行い、外国人労働者の技能実習生として2名採用をしました。

イ OJT 制度を中核に職員一人ひとりを育成し、チームケアを推進する。

実施施策	新人教育係の育成及びメンター制度の充実（達成度 100%）
現状と課題	新人教育係の取り組みに関しては、職務基準書を用いた OJT が新人職員の知識・技術の向上に繋がっている。従来のチューター（教育係）制度をメンター制度に改めたが、チューター制度との混同が見受けられる。また、同施設内からメンターを任命した場合、メンティがメン

	ターへ相談しづらい場合もあるため、十分に活用しづらい点があったと考えられる。メンター制度は新卒のみの対象となっているが、近年では中途採用職員も増加しているため、教育と定着支援が課題となっている。新入社員の定着状況に関しても、新卒後3年以内の退職者数が増加しており、新たに入社した職員への教育と定着支援が課題となっている。
取組の方向性	新卒及び中途採用職員の教育と定着支援の充実を図るために、新人教育係及びメンター制度を併用し、役割を明確化する必要がある。 ① 新入社員1名に対してチューターを任命し、部門ごとに役職員をメンターとして任命します。(斜めメンター制度) ② チューターとメンター職員との役割の違いについて、正しい役割を学んだ上でそれぞれを任命し、メンターについては施設を超えて相談できるよう整備します。 ③ 新入社員(中途)用の教育計画を運用します。
取組み成果	新卒及び中途採用職員の教育と定着支援の充実を図るために、新人教育係及びメンター制度を併用し、役割の明確化に努めました。 ① 新入社員1名に対してチューターを任命し、部門ごとに役職員をメンターとして任命しました。(斜めメンター制度) ② チューターとメンター職員との役割の違いについて、正しい役割を学んだ上でそれぞれを任命し、メンターについては施設を超えて相談できるよう整備しました。 ③ 新入社員(中途)用の教育計画を運用しました。

実施施策	リカレント教育の推進 (達成度 100.5)
現状と課題	国はリカレント教育を推奨しており、その背景には少子高齢化による人口減少時代を見据え、高齢になっても働き続けるために“自らが進んで学び続ける”ことが必要とされている。内閣府の資料「リカレント教育の現状」によると、働きながら学べる環境を整備する企業は1割程度(2019年)となっている。当法人ではリカレント教育の推進として資格取得応援制度を2018年度より導入し、この制度を活用して資格を取得した職員が増えている。今後、資格取得応援制度の周知に限らず、時代の変化に応じた新たな制度の検討が必要である。
取組の方向性	① 管理職及び指導職のキャリア支援の意識向上を図ります。 ② 施設長・管理者のキャリア面接を通じて、一般職員等の資格取得とキャリアイメージの向上を図ります。リカレント教育に関しても積極的に働きかけを行い、優秀な人財を育てる循環に繋がります。

	③ リカレント教育が必要な背景や資格取得に対してのモチベーションアップを目的に、社内広報を継続して行います。
取組みの成果	① 管理職及び指導職のキャリア支援の意識向上に努めました。 ② 施設長・管理者のキャリア面接を通じて、一般職員等の資格取得とキャリアイメージの向上に努めました。リカレント教育に関しても積極的に働きかけ、優秀な人財を育てる循環に繋げました。 ③ リカレント教育が必要な背景や資格取得に対してのモチベーションアップを目的に、社内広報を継続して行いました。

ウ 職場風土を改善し、職員の定着率とモチベーションを高める。

実施施策	人間関係づくりの強化（達成度 90%）
現状と課題	現状、施設の小規模化や利用児者の重度化・重複化に加えて、属人化した日常業務が増加している。仕事のムラや職員自身に余裕がなく、職務において新しいことを始めようとする意識を持ちにくくなり、チーム内で改善策等の意見を出し合い職場の活性化に繋げる取り組みが必要となる。新人職員に対しては、メンター制度により相談等の支援をしているが、中堅職員においても現場の慌ただしさから職員間での情報共有、困りなどの相談ができる時間がなく設けられていない。これからは、職員一人ひとりのモチベーションを高め、やりがいを持って働ける職場環境を構築していくことが必要である。
取組の方向性	チームとして、管理職・指導職及び若手職員、中堅職員が意見を出し合える環境づくりを目指し、チーム一丸となり取り組む流れを構築していく必要があります。 ① 各施設において、チームを編成してリーダー的な中堅職員（チューター）を任命し、業務においての困りごとや相談などができる体制を構築します。チーム内での解決ができない場合は、全体で協議・解決に努めます。 ② 日常の勤務において、会話しやすい環境と関係性を作るとともに、定期的に面談を設定して話しやすい雰囲気づくりに努めます。 ③ 事業計画について、職員全体で目標設定を行い、全職員参画で取り組む体制を作ります。 ④ カエル会議において、様々な意見や提案を出し合うことにより職場内の活性化につながり、職員間の信頼関係も構築されます。
取組みの成果	チームとして、管理職から若手職員が意見を出し合える環境づくりを目指し、チーム一丸となり取り組む流れを構築してきました。 ① 各施設において、チームを編成してリーダー的な中堅職員（チュ

	ーター)を任命し、業務においての困りごとや相談などができる体制を構築してきました。チーム内での解決ができない場合は、全体で協議・解決ができるよう職員会議等を活用して取り組みました。 ② 日常の勤務において、会話しやすい環境と関係性を作るとともに、定期的に面談を行い、話しやすい雰囲気づくりに取り組みました。 ③ 事業計画について、職員全体で目標設定を行い、全職員参画で取り組む体制づくりに努めました。 ④ カエル会議において、様々な意見や提案を出し合い職場内の活性化に繋がり、職員間の信頼関係も構築されました。
--	---

実施施策	理念・基本方針の具現化 (達成度 100%)
現状と課題	当法人は創立時に「利用者本位の最良の福祉の実現」を理念に掲げ、「人と人とのつながり」を重視しながら、時代の変化に対応してきた。今現在の理念「共歩・共笑・共育」に基づく基本方針を具体化し、個々の職員の行動に落とし込む必要がある。
取組の方向性	全役職員が法人理念・基本方針を念頭に掲げ、利用者本位の最良の福祉の実現に向けて、地域のニーズに応えられるサービスを提供し、地域福祉の拠点として法人経営に努めます。 ① 「利用者児の満足と幸せの追求」「法人・施設の発展性と安定性の追求」「集うスタッフの幸せの追求」をPDCAサイクルで取り組みます。 ② 法人と職員の相互信頼・発展の共創を図り、ステークホルダー(利用者児、そのご家族・関係者、地域住民など)への説明責任を基本方針として取り組みます。 ③ 理念・基本方針について、朝礼などに法人理念についての時間・項目を設けて、職員に日々の仕事と経営理念が繋がるようにします。また、指導職が日々の業務に結びつけ、個々の行動に落とし込み人材育成に努めます。
取組みの成果	全役職員が法人理念・基本方針を念頭に掲げ、利用者本位の最良の福祉の実現に向けて、地域のニーズに応えられるサービスを提供し、地域福祉の拠点として法人経営に努めました。 ① 「利用者児の満足と幸せの追求」「法人・施設の発展性と安定性の追求」「集うスタッフの幸せの追求」をPDCAサイクルで取り組みました。 ② 法人と職員の相互信頼・発展の共創を図り、ステークホルダー(利

	用者児、そのご家族・関係者、地域住民など）への説明責任を基本方針として取り組みました。 ③ 理念・基本方針について、朝礼などに法人理念についての時間・項目を設けて、日々の仕事と経営理念が繋がる取り組みました。また、指導職が日々の業務に結びつけ、個々の行動に落とし込み人材育成に努めました。
--	--

エ 業務の生産性を高め、ワークライフバランスを推進する。

実施施策	ICT 活用による業務効率化の推進（達成度 80%）
現状と課題	国は、ICT を活用して職員の身体的・精神的負担軽減を図り、介護現場等に時間的・心理的余裕を生じさせ、人手不足の中でも質の高いサービスが提供できるよう、積極的な活用が推進されている。 入所施設等において、年々重度利用者が増加している中、よりよいサービス提供を目指すには業務の効率化を推進し、職員への身体的・精神的負担を軽減していく必要がある。利用者支援後の事務業務として、日々の支援記録等を作成していることにより、時間外での業務が増加している。 報酬改定において、職場環境等要件として厚生労働省が示している「生産性向上ガイドライン」に基づき、業務改善活動の体制構築及び現場の課題の見える化を実施する必要がある。
取組の方向性	① ICT を活用した睡眠センサーマット、並びに情報共有ツールとして「インカム」を導入します。また、介護ロボット「HUG」等の導入に向けて検討する。 ② 事務業務として、個々の利用者の記録作成が必要であるため、タブレットやノートパソコン等の導入、及び記録時間の確保に向けてカエル会議等を活用し検討する。 ③ 介護技術及び福祉用具等の使用マニュアルを作成し、全職員に共有する。 ④ 各施設での日常の業務において、業務改善に向けてプロジェクトリーダー及びメンバーを選出し、改善活動のステップとして PDCA サイクルの基、施設職員全体でカエル会議等を行い、業務の改善に取り組みます。
取組みの成果	① ICT を活用した新たな導入はありません。久保更生園において浴室にリフト設置等の導入に向けて検討してきました。結果としては現状の建物の構造上では設置では困難である。 ② 事務業務として、個々の利用者の記録作成が必要であるため、タ

	タブレットやノートパソコン等の導入、及び記録時間の確保に向けてカエル会議等を活用し検討しました。 ③ 介護技術及び福祉用具等の使用マニュアルを作成し、全職員に共有する。 ④ 各施設での日常の業務において、業務改善に向けてプロジェクトリーダー及びメンバーを選出し、改善活動のステップとしてPDCAサイクルの基、施設職員全体でカエル会議等を行い、業務の改善に取り組みます。
--	---

実施施策	健康経営の充実（達成度 100%）
現状と課題	健康経営が注目されている理由として、少子高齢化による労働人口の不足から労働環境が悪化し、職員の負担が増えているためとされている。職員が体調を崩すと、自身だけでなく、その家族も仕事との両立が困難になる恐れがある。職員がより健康で豊かな人生を歩むためにも、職員の健康教育等を定期的 to 実施し、健康の保持・増進、活力向上に繋げる。 当法人として、職員の心身の健康保持・増進は職員の QOL 向上だけでなく、利用児者の QOL 向上に関連し、組織の継続的な発展を支える基盤と考え、全ての職員とその家族を積極的にサポートしていく必要がある。
取組の方向性	① 健康経営優良法人認定（経済産業省）を継続取得します。 ② 法人全体として、衛生委員会が中心に全職員対象とし、客観的に自身の基礎体力を把握し、より健康意識を高めることを目的とした体力測定を継続的に実施します。 ③ 職員自身の健康づくりとして、健康管理に対する意識の向上、セルフケアの充実、食事、喫煙、飲酒等の生活習慣改善に伴う内容を施設ごとで取り組みます。 ④ 職員定期健康診断の結果を基に、メタボリックシンドロームの該当・予備群が全国同業態の平均値より高い結果となっているので、福利厚生の一環として、各施設に「オフィスでごはん」を一定期間導入し、生活習慣病リスクの改善を目指します。また、職員の満足度も高まり生産性の向上に期待をしているため、アンケート等を定期的に行います。 ⑤ 「職員相談室」を設置し、法人内職員のストレスチェック及びこころのセルフチェック、個人面接を実施します。医療機関等との連携体制の構築を図り、実績を積み上げるよう取り組みます。

	⑥ 健康経営推進として、健康経営プロジェクトと衛生委員会等が中心となり、健康経営方針等を社内外に発信し、管理者を含み全職員に健康増進に関する取り組みを再度周知することにより、さらに健康意識が高くなり仕事へのパフォーマンス向上に繋がります。
取り組みの成果	① 健康経営優良法人認定（経済産業省）を継続取得のため申請書を申込みました。 ② 法人全体として、衛生委員会が中心に全職員対象とし、自身の基礎体力を把握し、より健康意識を高めることを目的とした体力測定を継続的に実施しました。また、町内の民間企業についても参加しました。 ③ 職員自身の健康づくりとして、健康管理に対する意識の向上、セルフケアの充実、食事、喫煙、飲酒等の生活習慣改善に伴う内容を施設へ周知しました。 ④ 職員定期健康診断の結果を基に、メタボリックシンドロームの該当・予備群が全国同業態の平均値より高い結果となっているので、利用希望の施設に「オフィスでごはん」を導入しました。栄養士から栄養バランスなどの助言をもらい、生活習慣病リスクの改善を目指しました。また、職員の満足度も高まり生産性の向上に期待をしているため、アンケートを6月に実施しました。 ⑤ 「職員相談室」を設置し、法人内職員のストレスチェック及びこころのセルフチェック、個人面接に取り組みました。大分市の企業等に活動範囲を拡大し、実績を積んできました。 ⑥ 健康経営推進として、健康経営プロジェクトと衛生委員会等が中心となり、健康経営方針等を社内外に発信し、施設長を含み全職員に健康増進に関する取り組みを再度周知しました。さらに健康意識が高くなり仕事へのパフォーマンス向上に繋げることができました。

（２）利用者児の生活を支えるサービスの質の向上

ア 先進的で魅力あるサービスを提供し、サービスの質を高める。

実施施策	ICT 活用とエビデンスに基づく支援の実践 （達成度 100%）
現状と課題	近年、ICT 活用による労働生産性の向上、業務内容やサービスの質の評価を図る取り組みが進められている。障害者支援施設等において、重度化が年々進んでいるため ICT や介護ロボット等の技術活用が不可欠であり、今後は ICT の導入・活用を進めていき、エビデンスに基づく介護・支援等の実践と効果検証が必要である。

	介護施設においてインカムの導入が完了し、日々の業務の中で取り扱いや使用方法等について、効率よく使用できるよう取り組む必要がある。
取組の方向性	① ICT を活用したデジタル機器の選定及び使用効果を検証し、統一かつ効果的な運用が行えるようにします。 ② 介護施設において、インカム導入したことにより日常業務を行う中、様々な問題点や改善事項等を定期的に洗い出し、快適に使用できるようマニュアル作成の準備をします。
取組みの成果	① ICT を活用したデジタル機器の選定及び使用効果を検証し、導入に向け各施設ごとに検討しました。 ② 介護施設において、インカム導入したことにより日常業務を行う中、様々な問題点や改善事項等を定期的に洗い出し、快適に使用できるようマニュアル作成をしました。

実施施策	該当施設における第三者評価の受審完了（達成度 100%）
現状と課題	よりよい福祉サービスの実現に向けて、公正・中立な第三者評価機関による福祉サービスの評価の受審と結果の公表、それに伴う利用児者のサービス選択の円滑化及び事業の透明性の確保並びにサービスの質の向上を図る。
取組の方向性	2025年度は、児童養護施設山家学園、福祉型障害児入所施設木埋学園、多機能型事業所希望の家、デイサービスセンター長宝の4施設が「福祉サービス評価センターおおいた」に評価を依頼します。その結果を幅広く利用児者やその関係者、事業者等に公表することで、利用する施設の選択肢の一つとして情報提供します。また、評価結果に基づくサービス質の向上に向けた取り組みを通じて、サービス内容の改善を図ります。
取組みの成果	2025年度は、デイサービスセンター長宝 9/25、児童養護施設山家学園 11/18、多機能型事業所希望の家 1/27 に「福祉サービス評価センターおおいた」の評価受審をしました。その結果を幅広く利用児者やその関係者、事業者等に公表することで、利用する施設の選択肢の一つとして情報提供しました。評価結果に基づくサービス質の向上に向けた取り組みを通じて、サービス内容の改善に取り組みました。地域連携推進会議が第三者評価の代替となるため、久保更生園が 12/5、緑の家が 12/13、グループホームが 2/26、障害者支援施設木埋学園が 3/5 にそれぞれ開催しました。

イ 安心安全で快適な暮らしを保証し、利用者児の満足度を高める。

実施施策	小規模化・地域化・分散化の推進（達成度 90%）
現状と課題	1989（平成元）年に新築した福祉型障害児入所施設及び障害者支援施設は、大舎制の建物であり一部段差もある状況で完全バリアフリー化にはなっていない。2017（平成29）年には大分・熊本地震、並びに老朽化に伴いその都度建物の改修を行ってきた。 木埋学園は児者併設型に移行しており、今後は児者分離・ユニット化を計画している。障害者支援施設久保更生園については、重度化に伴い車いすの利用者が増加しており、バリアフリー化への改修が必要である。また、既存の建物は国庫補助にて新築工事を実施したことにより、耐用年数が10年程度残っているため移転計画が困難である。
取組の方向性	木埋学園においては、児者分離及びユニット化を目指し移転改築若しくは新築の計画する必要がある。障害者支援施設木埋学園・久保更生園においては、重度・高齢化に応じたユニット化の計画とともに、より専門的な医療機関と連携が図れる地域への移転計画を検討します。 ① 国への働きかけ、大分県及び関係市町村との移転計画に伴う協議を継続的に行う ② 移転候補地の選定 ③ 資金計画を策定
取組みの成果	木埋学園においては、児者分離及びユニット化を目指し移転改築若しくは新築の計画する必要がある、障害者支援施設木埋学園・久保更生園においては、重度・高齢化に応じたユニット化の計画とともに、より専門的な医療機関と連携が図れる地域への移転計画を検討しました。 ① 大分県及び由布市との新築移転計画に伴う協議を継続的に行いました。大分県及び由布市には、新築移転に関する陳情書を提出し今後の計画等について協議をしました。 ② 移転候補地の確定には至っていませんが、候補地の選定には取り組みました。 ③ 資金計画の策定は、中期運営計画のもと各施設の資金計画目標の策定に取り組みました。

実施施策	重度化への対応と権利擁護の徹底（達成度 100%）
現状と課題	障害者支援施設において、障がいの重度化・重複化によって自立が困難な利用者が年々増加しており、これまで以上に重度・重複障がい

	者への支援技術向上が必要となっている。また、権利擁護の推進に関して虐待は福祉施設においてあってはならないことであり、法人・全施設の役職者が中心となり、全職員で権利擁護の徹底が必要である。
取組の方向性	① 重度・重複障がい児者及び各施設の支援マニュアルの活用、見直し並びに周知に取り組みます。 ② 支援に関する施設ハード面の改善策を検討するとともに、必要に応じて改修工事を含め計画的に実施します。 ③ 虐待防止委員会において、権利擁護研修等の中長期計画策定・実施します。
取組みの成果	① 日々の業務において、重度・重複障がい児者及び各施設の支援マニュアルを活用し、定期的に見直すとともに職員へ周知しました。 ② 支援に関する施設ハード面の改善策を検討するとともに、必要に応じて修工事を含め計画的に実施しました。 ③ 虐待防止委員会において、権利擁護研修等の中長期計画の基、8/21 及び 12/11 に「身体拘束適正化の推進」のテーマで実施しました。

ウ 施設機能を積極的に開放し、地域とのつながりを強化する。

実施施策	地域における公益的（無料または低額）な取組の充実（達成度 100%）
現状と課題	新型コロナウイルス流行以前のような日常になっており、生活支援宿泊所生活ホームの受け入れ相談が増加している。また、事業実施地域を大分市や別府市近郊まで拡大したことで、関係機関からの問い合わせ等についても増加しており、生活ホームの利用に繋げたい。今後生活困窮者への支援技術向上と受け入れ体制、連携体制の構築に努める必要がある。 各施設における取り組みについては、あなみ保育園では共生型子ども食堂「いこいのキッチン」の運営、希望の家ではスマイル広場の夢教室や公園の利用充実、緑の家では地域交流ホームの地域住民への活用、生活ホームでは空所時の活用を行います。「福祉の森」については、以前までは月 1 回の整備を全事業所にて計画していたが、年々利用者の重度化により利用者支援の比重が高くなり、職員による整備が至っていない状況である。その他の施設においても、地域における公益的な取組みが今後必要である。
取組の方向性	① 法人内の「生活困窮者就労訓練事業」認定について、大分県から受けた各施設と自立相談支援事業所が連携して就労支援の充実を図ります。

	② あなみ保育園は、共生型子ども食堂「いこいのキッチン」を月1回行い、グラウンド開放についても月1回開放します。 ③ 生活支援宿泊所生活ホームは、地域や福祉施設などが企画した行事等の利用及び宿泊体験の場として提供する。また、災害時において近隣住民の避難場所として開放します。 ④ 有料老人ホームゆふにおいては、災害発生時には昼夜を問わず地域住民の避難所として受け入れます。 ⑤ 法人が保有する「福祉の森」については、施設職員での管理が困難なため地元住民の協力のもと管理等を行い、四季折々においてより多くの地域住民の利用を期待するとともに、屋外トイレを無料で開放します。 ④ 地域住民がいつでもイベント及び集会場として活用できるよう、地域交流ホームを開放する。 ⑤ 木埋学園では、由布市内の企業が主催する清掃活動等に積極的に参加し、地域の方々との交流に引き続き取り組みます。
取組みの成果	① 「生活困窮者就労訓練事業」については、令和7年度は2名の利用がありました。（1名は地域の高齢者施設、1名は生活保護を受けながら挟間のアパートに居住） ② あなみ保育園は、共生型子ども食堂「いこいのキッチン」を月1回実施しました。グラウンド開放についても月1回開放しました。 ③ 生活支援宿泊所生活ホームは、地域や福祉施設などが企画した行事等の利用及び宿泊体験の場として提供しました。また、災害時において近隣住民の避難場所として開放しました。 ④ 有料老人ホームゆふにおいては、災害発生時には昼夜を問わず地域住民の避難所として受け入れました。 ⑤ 法人が保有する「福祉の森」については、施設職員での管理が困難なため地元住民の協力のもと管理等を受けていただき、より多くの地域住民が利用されました。また、利用された際には屋外トイレの開放もしました。 ④ 地域住民がいつでもイベント及び集会場として活用できるよう、地域交流ホームを開放しました。また、地域のクラブチーム等についても定額で貸し出しました。 ⑤ 木埋学園では、由布市内の企業が主催する清掃活動等に積極的に参加し、地域の方々との交流に取り組みました。

(3) 安定的で持続的な経営基盤の確立

ア 収入の安定確保と経費増大の抑制で、安定性の高い財務体質を維持する。

実施施策	補助金及び助成金と加算の確実な取得 (達成度 60%)
現状と課題	報酬改定への対応は基より、新型コロナウイルス及びウクライナ情勢等の影響により物価高騰への対応が今後も求められている。施設整備(建物の建て替え及び修繕)や備品・固定資産等の購入費用に関しては、補助金等を活用して財源の確保が必要となる。加算についても、現状の職員配置やサービス内容を見直し、「確実な加算の取得」を行い、同時に経費の削減についても取り組む必要がある。 今後も各施設において利用率向上が課題であり、保育所では出生率が低水準で推移しているため、利用園児が定員に満たない状況が続いています。また、障害者支援施設については比較的に利用率が高い水準であるが、黒字経営に必要な利用率 95%には至っていません。(障害者支援施設木埋学園 77%、緑の家 93%、久保更生園 88%) 多機能型事業所希望の家では、就労継続支援 A 型事業所定員 10 名に対して 8 名が利用している。(外部サービス利用型 GH より 4 名、地域から 4 名) 就労継続支援 B 型事業所定員 30 名に対して 26 名が利用しています。(障害者支援施設緑の家から 11 名、外部サービス利用型 GH 及び地域から 15 名) 利用状況として外部からの利用者獲得が今後も課題である。デイサービスセンター長宝については、月平均利用率 90.2% の高い水準で推移しているが、介護度の低い利用者が多い状況である。
取組の方向性	① 各種関連する事業について、国庫及び民間団体の補助金や助成金を積極的に活用して資金の確保に努めます。 ② 施設ごとに現状取得している加算を整理し、新たに取得可能な加算を研究して、確実な加算の取得に努めます。 ③ 報酬改定に基づく加算について、取得のための情報収集した内容を整理し、職員の配置及び実施要項と照らし合わせて、必要とされる要件を取り組み確実な加算の取得に努めます。 ④ 各施設においてショートステイを実施しているが、新型コロナウイルス感染が 5 類に移行されたことにより、従来どおりの利用件数に回復しているため受け入れ体制を整えるとともに、関係機関等への共有含み積極的な受け入れに取り組めます。 ⑤ 法人・施設全体として、各種事業を実施する際には複数の業者での見積もり競争等を行い、経費削減を努める。
取組みの成果	① 各種関連する事業について、国庫及び民間団体の補助金や助成金

	を積極的に活用して資金の確保に努めました。しかしながら、申請後の審査により漏れた事案も生じました。(取得した補助金は由布市教育・保育施設副食費助成事業費補助金 740,000 円、大分県中小企業等デジタルスキル向上支援事業支援金 44,000 円、NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえより 100,000 円) ② 施設ごとに現状取得している加算を整理し、新たに取得可能な加算を研究して、確実な加算の取得に努めました。しかしながら一部の施設では、加算の資格要件に満たなく過誤となりました。 ③ 報酬改定に基づく加算について、取得のための情報収集した内容を整理し、新たに加算の取得に努めました。(自立支援担当職員加算、自立生活支援事業、1 歳児配置改善加算) ④ 各施設において、ショートステイの受け入れに積極的に努めました。施設によって受け入れ実績はほぼ例年通りではあるが問い合わせについては増加しています。 ⑤ 法人・施設全体として、各種事業を実施する際には複数の業者での見積もり競争等を行い、経費削減を努めました。
--	--

実施施策	経営ドック等の受審完了 (達成度 50%)
現状と課題	社会福祉法人は「非営利型」に分類されており、社会福祉法人が経営できる第一種社会福祉事業は公共性が高く、企業や NPO はその事業経営(参入)が制限されている。また、経営資源(ヒト・モノ・カネ・トキ・シラセ)のあり方は、社会情勢に伴い変化を続けることが予想され、地域福祉を推進する社会福祉法人として柔軟な対応が求められている。 当法人は、児童福祉施設(保育所、児童養護施設、福祉型障害児入所施設)、高齢者施設(通所介護等)、障がい者施設(障害者支援施設、就労支援施設等)などを複合的に経営しており、利用児者の QOL 向上や従業員の処遇向上、生産性の向上や適切な情報の管理などが求められており、その社会的責任は非常に大きく、現状の経営状況の再評価はもちろんのこと、新たな事業の展開に取り組む必要がある。
取組の方向性	① 全国社会福祉法人経営者協議会が行う「経営協ドッグ」を活用して、法人全体並びに各施設の経営状況を診断する。 ② 今後の法人並びに各施設の計画、並びに単年度事業計画の策定に活用できるよう取り組む。
取組みの成果	① 全国社会福祉法人経営者協議会が行う「経営協ドッグ」を活用して、法人全体並びに各施設の経営状況を診断には至っていません。

	② 経営ドックの診断ができていないが、今後の法人並びに各施設の計画、並びに単年度事業計画の策定には支障がありませんでした。。
--	--

イ 中長期的な視点をもって、持続性の高い経営を行う。

実施施策	利用ニーズに応じた事業の在り方検討（達成度 70%）
現状と課題	保育園児の減少に伴い、児童発達支援事業や放課後等デイサービスなどを経営する保育所が増加している。今後、介護保険制度が改正されることで通所介護等のあり方が変化することも予想される。 由布市においては庄内町の少子高齢化が顕著である。町内のニーズに限らず他県・他市町村のニーズを適切に捉えつつ、既存サービスのあり方を検討する必要がある。まず、保育所では発達障がい疑いの児童が利用しており、保育士の余剰確保ができない状況である。近隣の保育所においても同様な状況がみうけられる。採用状況においても大分市中心部や他県へ若者が流れていき、人財の確保も難しい状態である。 介護施設については、令和 6 年度から介護支援専門員の退職により居宅介護事業所を休止していたが、応募がなかったことにより令和 6 年度末をもって廃止となり、今後利用者の確保において大変厳しくなると予測される。 就労施設では、由布市内には A 型が 4 事業所、B 型が 6 事業所あり、人口に対し 10 事業所は他市に比べて割合が多い。そのため他の事業所も独自の個性ある事業展開をしており、当事業所においても地域に沿った魅力ある作業内容を展開する必要がある。 スマイル広場は、地域住民等が道の駅のように気軽に利用できるよう、パン販売や野菜等の販売や様々な教室等を利用できるスペースを提供している。今後も地域の憩いの場として、より多くの地域住民に利用して頂けるように変化が必要である。また、隣接する公園をさらに充実させ、町内のスポットになるよう目指したい。（高齢層をターゲット・マルシェ等の取り組み客層を広げる） 介護サービス包括型 GH では、利用者の高齢化・重度化が今後も進んで行くことは必須であり、医療機関等との連携を密に行いながら、緊急に対して即座に対応できる支援体制を構築していく必要がある。外部サービス利用型 GH については、一部の建物が老朽化に伴い、改築や移転も視野に入れて計画する必要がある。
取組の方向性	① スマイル広場の集客への戦略として、イベント等の SNS への更新頻度の向上、チラシ等にて地域の方々に告知します。また、新たに

	飲食スペースの確保としての改修工事、来店者並びに公園への利用者の安全への配慮として、出入口等の改修工事を実施します。 ② 隣接する有料老人ホームゆふ地下1階に児童発達支援事業所の開設準備は整っている状況であります。現状、職員の確保に至っていない状況であるため、ハローワーク等への求人はもとより、当法人は整備している職員等紹介制度の活用を含め、人員確保に取り組みます。開所後については、庄内町内の保育所へ情報共有を行い、対象児童の確保に努めます。 ③ 介護施設については、法人内の居宅介護事業所が廃止となり、外部の居宅介護事業所との情報共有を図るとともに、関係性の構築や施設の特色等を強調していく必要があります。 ④ 就労施設については、支援学校や相談支援事業所との連携を強化し、実習生の積極的な受入れ及び事業所のPRを行い、新たな利用者確保に努めていきます。また、就労支援プログラムの見直しを図り、サービス向上目指すとともに事業所の特徴を確立します。 ⑤ 外部サービス利用型 GH では、建物の老朽化に伴い年々修繕箇所も増えており、安心した生活環境や継続した運営ができるよう計画的な修繕が必要である。そのためには定員の充足を図り、資金の確保が急務である。介護型サービス GH については、年々重度化する利用者に伴い現状のサービスでの対応が困難である。今後、現状の支援内容及び必要とするサービスを精査し、施設入所支援事業への移行を検討します。 ⑥ 障害者支援施設緑の家においては、令和4年8月に生活介護事業の定員変更（40名から50名）をしたことにより、報酬単価が減額となり日中サービス利用数の確保が進んでいない状況です。障害者支援施設として、施設入所支援事業と生活介護事業の利用人数のバランスが良くなく、早急に改善する必要があります。
取組みの成果	① スマイル広場の集客への戦略として、イベント等のSNSへの更新頻度の向上、チラシ等にて地域の方々に告知しました。また、新たに飲食スペースの確保としての改修工事、来店者並びに公園への利用者の安全への配慮として、出入口等の改修工事の実施しまでには至っていません。 ② 有料老人ホームゆふ地下1階に11/1付で児童発達支援事業所「デイジーハウス」を開所しました。開所後については、庄内町内の保育所へ情報共有を行い、対象児童の確保に努めました。 ③ 介護施設については、法人内の居宅介護事業所を廃止し、外部の

	居宅介護事業所との関係性の構築を図るとともに、施設の特徴等を強調して情報共有に取り組みました。 ④ 就労施設については、支援学校や相談支援事業所との連携を強化し、実習生の積極的な受入れ及び事業所のPRを行い、新たに利用者2名の確保に努めました。また、就労支援プログラムの見直しを図り、サービス向上を目指すとともに事業所の特徴を確立に取り組みました。 ⑤ 外部サービス利用型GHでは、特に建物の老朽化が進んでいるホームの代替として、中古物件を購入しました。介護型サービスGHについては、令和8年3月31日付けで廃止にしました。利用者については、施設入所支援事業及び介護施設、並びに外部サービス利用型へ移行しました。 ⑥ 障害者支援施設緑の家については、令和4年8月に生活介護事業の定員変更（40名から50名）をしました。報酬単価が減額となり日中サービス利用者数の確保に至っていません。
--	---

実施施策	新築・大規模修繕計画に基づく運用（達成度100%）
現状と課題	わさだ事業所の展開として、事業を3期に分けて計画を行うにあたり、第1期工事として放課後等デイサービス事業開始に伴う建築工事、並びに開設準備を計画している。また、建築工事に伴う資金として、福祉医療機構等からの借入金の資金計画を立案するとともに、関係機関と協議を行う。 障がい部門の入所施設（障害者支援施設木埋学園・久保更生園）の移転計画について、大分県並びに関係市町村と協議する。 外部サービス利用型GHにおいて、築年数の古い建物に関して年々修繕箇所が増えており経費が増加している状況である。また、日常生活での不便さも見受けられる。
取組の方向性	① わさだ事業所について、第1期事業として放課後等デイサービス事業所の工事業者選定を行い、建築工事に伴う指名競争入札を実施します。また、2025（令和7）年度の10月の開所に向けて指定申請含めて準備を行います。 ② 障がい部門の障害者支援施設木埋学園・久保更生園について、国庫補助の関係による耐用年数が10年残っていることにより、移転が困難なため計画的に修繕を実施します。今後も継続して移転予定地の選定及び関係機関との協議し、移転候補地を確定する。 ③ 外部サービス利用型GHについて、必要に応じて修繕を行います。

	また、地域の中古物件並びに当法人施設が保有する建物の再利用等含めて検討する。
取組みの成果	① わさだ事業所について、第1期事業として放課後等デイサービス事業所の新築工事に着手し、令和8年4月より事業開始の指定を受けました。 ② 障がい部門の障害者支援施設木埋学園・久保更生園について、大分県及び由布市に新築統合移転に関する陳情書を提出しました。移転予定地の選定及び大分県並びに由布市と協議し、移転候補地を選定に努めました。 ③ 外部サービス利用型 GH について、GH「こすもす」の隣接する中古物件を購入しました。

ウ 組織内の連携を強化し、強固な組織体制と経営基盤を確立する。

実施施策	DX化推進等による連携・情報共有の円滑化（達成度 90%）
現状と課題	国では DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進が掲げられている。DX は労働環境や日常の業務プロセスに変革を起こすことを意味しており、具体的には、自社の魅力を伝達する「伝える力」、社外との関係を広げ深める「つながる力」、情報で事業の回転率を高める「回転率」、情報の使い勝手を良くする「基礎体力」、情報で現場を滑らかにする「体幹力」の目的がある。 <デジタルの活用例> ・「伝える力」は Web サイト、SNS 発信、動画サイト等 ・「つながる力」は EC サイト、ネット予約、オンライン商談当 ・「回転率」は業務管理システム、電子決済、ドローン等 ・「基礎体力」はスマートホン、タブレット端末、無線 LAN 等 ・「体幹力」はファイル共有、チャットツール、掲示板システム等 当法人においては、2024 年（令和 6）度からは勤怠管理・給与システムの本格運用を行い、「労務管理の強化」と「業務効率化」を図る。人事管理・評価においては、新たにシステムを導入して本格運用に向けて準備を行う。
取組の方向性	報酬改正に伴い現状の処遇改善加算について、職場環境等要件が見直されたことにより人事管理・評価システム、決裁の電子化システムの導入に合わせて既存の勤怠管理システム及び給与システム等の生産性向上の取り組みとして導入します。災害発生時における情報共有体制の確立（安否確認システムの導入や Slack 等の SNS 活用）、情報リテラシー教育の実施など、デジタル化推進体制を整備し、業務時間

	の短縮化を図り、利用児者の支援と情報共有の充実、職員の両立支援の充実に繋げる。 ① 勤怠管理システム及び給与システムの本格運用 ② 人事管理・評価システムの導入に向けての準備並びに本格運用 ③ 決裁書の電子化の実証実験及びに向けての準備 ④ 災害発生時における情報共有体制の確立
取組みの成果	人事管理・評価システム、決裁の電子化システムを導入して、既存のシステムと連動させ生産性向上に取り組みました。情報リテラシー教育の実施などデジタル化推進体制を整備し、業務時間の短縮化を図るとともに利用児者の支援と情報共有の充実、職員の両立支援に取り組みました。災害発生時における情報共有体制の確立（安否確認システムの導入や Slack 等の SNS 活用）には至っていません。 ① 勤怠管理システム及び給与システムの本格運用。 ② 人事管理・評価システムの本格運用 ③ 決裁書の電子化のテスト運用

実施施策	園長会の部会形式化の推進（達成度 100%）
現状と課題	現状では各施設・所属長が参加し、年 3 回（4・10・1月）に園長会及び事故防止対策委員会を開催し、審議事項に時間を割く取り組みを続けている。また、児童・障がい・介護部門単位での会議を必要に応じて開催している。実務者会議及び各委員会においても同様に開催している。今後は、各部門会議並びに各委員会も含めて、開催頻度を見直すことで更なる効率化を図る。
取組の方向性	① 定期園長会は年 3 回の開催とする。（1月・4月・10月） ② 児童・介護、障がい部門の会議は、必要に応じて開催する。 実務者会議及び各委員会についても同様の扱いとする。 ③ 臨時園長会は緊急時等必要に応じて開催する。実務者会議において決定が困難な事項については、定期園長会での審議を原則とする。
取組みの成果	① 定期園長会は年 3 回開催しました。（1月・4月・10月） ② 児童・介護、障がい部門の会議は、必要に応じて開催しました。 実務者会議及び各委員会についても同様の扱いとする。 ③ 臨時園長会は緊急時等必要に応じて開催しました。実務者会議において決定が困難な事項については、園長会で審議しました。

3 実績利用率

(%)

施設名	定員	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
あなみ保育園	60名	62%	67%	70%	70%	64%	75%	72%	67%	74%	76%	71%	76%	70.3%
あなみ児童クラブ	22名	68%	66%	70%	69%	66%	69%	67%	64%	76%	72%	65%	66%	68.2%
山家学園	24名	71%	71%	67%	63%	63%	67%	67%	63%	63%	63%	71%	71%	66.7%
子育て短期利用事業	6名	4%	6%	6%	16%	4%	7%	3%	4%	8%	11%	7%	15%	7.6%
デイジーハウス	10名								0%	1%	21%	19%	26%	13.4%
木 埋 学 園 障害児入所	20名	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	80%	85%	90%	81.3%
短期入所事業	2名	30%	20%	35%	39%	39%	20%	39%	42%	23%	23%	25%	39%	31.2%
生活介護事業	30名	83%	83%	83%	83%	83%	83%	83%	83%	83%	83%	83%	80%	82.8%
施設入所事業	30名	86%	86%	86%	86%	86%	86%	86%	86%	86%	86%	86%	83%	85.8%
短期入所事業	2名	20%	23%	19%	39%	15%	24%	15%	20%	20%	18%	22%	18%	21.1%
緑の家 生活介護事業	50名	78%	78%	79%	79%	76%	77%	78%	78%	78%	79%	79%	76%	77.9%
施設入所事業	50名	92%	89%	92%	92%	87%	92%	91%	91%	91%	89%	94%	94%	91.0%
短期入所事業	1名	0%	26%	20%	23%	26%	23%	16%	33%	32%	42%	0%	0%	20.1%
久保更生園 生活介護事業	60名	88%	87%	87%	86%	85%	86%	86%	86%	86%	84%	82%	86%	85.7%
施設入所事業	60名	87%	86%	86%	85%	84%	85%	87%	85%	80%	73%	78%	87%	83.6%
短期入所事業	2名	0%	0.1%	0%	0%	0.1%	0%	0%	0.1%	0%	0.1%	0%	0%	0.1%
GH 外部サービス利用型	21名	95%	93%	95%	95%	91%	95%	92%	95%	93%	93%	95%	95%	93.9%
介護サービス包括型	12名	97%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	94%	91%	88%	74%	37%	60.1%
希望の家 就労継続支援 A 型	10名	96%	94%	94%	96%	95%	94%	97%	93%	91%	90%	96%	95%	94.3%
就労継続支援 B 型	30名	77%	79%	78%	77%	76%	72%	85%	80%	79%	80%	83%	77%	78.6%
長宝 通所介護事業	31名	77%	75%	78%	77%	75%	75%	73%	67%	72%	70%	65%	67%	72.4%
C 型事業	6名	33%	33%	100%	100%	100%	16%	0%	0%	0%	0%	0%	33%	34.5%

ゆふ	22名	91%	91%	91%	82%	82%	86%	77%	82%	77%	77%	77%	77%	86%	83.2%
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------

実績利用数

施設名	定員	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均/月
こうせいかん		46件	28件	30件	23件	27件	33件	60件	37件	30件	27件	35件	37件	37.4件
障害児相談支援		12件	5件	3件	1件	0件	1件	0件	7件	1件	9件	8件	4件	4.3件
地域相談支援		0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
生活支援宿泊事所	4名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	1名	1名	0名	1名	1名	0.3名
生活困窮者 就労訓練事業	5名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名
居室確保事業	—	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	0名	1名	1名	0名	0.2名

4 障害支援区分・介護区分

(1) 障害支援区分

施設名	区分2以下	区分3	区分4	区分5	区分6	合計	平均区分
木埋学園	0名	0名	3名	9名	13名	25名	5.40
緑の家	0名	16名	21名	10名	0名	47名	3.87
久保更生園	0名	0名	11名	20名	22名	53名	5.21
GH 介護包括型	0名	2名	3名	0名	0名	5名	3.60

(2) 介護区分

施設名	要支援2	要支援1	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	合計
長宝	0名	1名	9名	10名	3名	2名	1名	26名
ゆふ	0名	1名	7名	8名	2名	1名	0名	19名

5 固定資産物品購入物

(単位：千円)

名 称	請負業者	執行額	購入日
看板設置 (こども村植田)	(有)大日公告	2,785	令和8年3月22日
植栽 (こども村植田)	(有)松尾緑建設	921	令和8年3月6日
アスファルト工事 (山家学園)	(株)日野建設工業	1,496	令和7年8月6日
グラウンド周囲フェンス (山家学園)	(有)梶原工業	2,400	令和8年1月16日

6 修繕実施状況(大規模修繕を除く)

(単位:千円)

名 称	請負業者	執行額	完了日
GH こすもす中古物件改修工事	コージデザイン	4,385	令和8年3月31日

7 大規模修繕実施状況

(単位:千円)

名 称	請負業者	執行額	完了日
なし			

8 職員の男女比率

	人数	比率
男性	72 名	36.7%
女性	124 名	63.3%
合計	196 名	100.0%

9 勤務形態別の比率

	正規職員	継続職員	臨時職員	パート職員	計
男性	49 名 (45.0%)	1 名 (33.3%)	10 名 (30.3%)	12 名 (23.5%)	72 名 (36.7%)
女性	60 名 (55.0%)	2 名 (66.7%)	23 名 (69.7%)	39 名 (76.5%)	124 名 (63.3%)
合計	109 名	3 名	33 名	51 名	196 名

10 年代別人数

		10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代 以上	合計
男 性	正規職員	0 名	11 名	19 名	10 名	7 名	2 名	0 名	49 名
	継続職員	0 名	0 名	0 名	0 名	0 名	1 名	0 名	1 名
	臨時職員	0 名	2 名	1 名	1 名	0 名	3 名	3 名	10 名
	パート	1 名	0 名	2 名	0 名	1 名	6 名	2 名	12 名
	計	1 名	13 名	22 名	11 名	8 名	12 名	5 名	72 名
女 性	正規職員	1 名	22 名	12 名	11 名	14 名	0 名	0 名	60 名

	継続職員	0名	0名	0名	0名	0名	2名	0名	2名
	臨時職員	0名	2名	3名	1名	9名	8名	0名	23名
	パート	0名	0名	3名	5名	10名	12名	9名	39名
	計	1名	24名	18名	17名	33名	22名	9名	124名
合計		2名	37名	40名	28名	41名	34名	14名	196名

1 1 職員勤続年数別

		0～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26～30年	30年～	合計
男性	正規職員	13名	10名	7名	9名	3名	4名	2名	48名
	継続職員	0名	0名	0名	0名	0名	0名	1名	1名
	臨時職員	8名	2名	1名	0名	0名	0名	0名	11名
	パート	8名	1名	3名	0名	0名	0名	0名	12名
	計	29名	13名	11名	9名	3名	4名	3名	72名
女性	正規職員	32名	12名	4名	4名	1名	2名	5名	60名
	継続職員	0名	0名	0名	0名	0名	0名	2名	2名
	臨時職員	11名	7名	1名	4名	0名	0名	0名	23名
	パート	27名	7名	2名	1名	1名	1名	0名	39名
	計	70名	26名	7名	9名	2名	3名	7名	124名
合 計		99名	39名	18名	18名	5名	7名	10名	196名

1 2 採用者数

性別	施設名	正規職員	臨時職員	パート職員	合計
男性	山家学園		1名	1名	2名
	木埋学園	1名			1名
	緑の家			1名	1名
	久保更生園	2名			2名
	グループホーム		1名		1名
女性	あなみ保育園	1名			1名

	デイズハウス			1 名	1 名
	山家学園		2 名		2 名
	木埋学園	1 名			1 名
	緑の家	2 名			2 名
	久保更生園	1 名			1 名
	希望の家			1 名	1 名
	グループホーム			5 名	5 名
	長宝			3 名	3 名
合 計		8 名	4 名	12 名	24 名